

『人をつなげる観光戦略 人づくり・地域づくりの理論と実践』

橋本 和也 編

農業・農村領域 研究員 佐藤 彩生



『人をつなげる観光戦略
人づくり・地域づくりの理論
と実践』

編者／橋本和也
出版年／2019年
発行所／ナカニシヤ出版

本書では、社会学、文化政策学、文化人類学、観光学を専門とする8名の研究者が「観光まちづくり」における「観光人材育成」の今日的意義について分野横断的研究アプローチを行っています。前半部では、「観光学」が戦後の日本社会の変容の中でどのようにして教育として位置付けられてきたのか（第1章）、「観光まちづくり」論がどのように展開されてきたのか（第2章）、県の観光政策の財政問題が何か（第3章）について、わかりやすく紹介されています。

「観光まちづくり」が議論されるようになった初期（1990年代後半）においては、「観光まちづくり」の目的はまちづくりが第一義的であり、観光はその副産物としての扱いでした。しかし、地域の観光資源の商品化や誘客のプロモーションなど観光客誘致による課題解決型に次第に移行し、現在では政府や観光関連産業が深く関与することで、より計画的・戦略的な観光客誘致による経済活性化へとシフトしてきています。こうした中、「観光まちづくり」における「人材育成」に焦点が当てられ、どのような「観光人材」をどのようにして育成するのかが今日的な課題となっています。

いったん本の内容から離れて、現在の農山漁村振興施策に目を向けてみると、農林水産省が推進している「農泊」では、農山漁村に観光客を呼び込み地域に所得を生むこと、また地域の多様な主体がこの活動に協力することを目指すなど、現段階の「観光まちづくり」の潮流に乗っていると言えます。また、「農泊」に取り組む現場では、取組を長く続けていくために欠かせない人材育成まで手が及んでいないところが随所に見られます。つまり、農山漁村振興の現場においてもこうした「観光人材育成」は求められているのです。

後半部では、こうした課題に対して事例調査を基に、求められる「観光人材」とその教育・育成について各分野の研究者が考察を行っています。

第4章では、文化人類学的な視点や手法による「観光まちづくり人材」育成の検証を試みています。第

5章は、「地域にとって役に立つ観光人材」という視点とは異なり、コンテンツツーリズムなど観光客が旅の目的や楽しみ方を創造する「創造型観光」に対応した観光教育についての考察を行って

います。第4章、第5章はいずれも京都文教大学の地域連携学生プロジェクトを取り上げており、大学生と地域との交流を通して観光教育の検討が行われています。

一方で第6章は、著者のアクションリサーチがベースとなっています。かつてのカリスマ型リーダーによる地域の牽引ではなく、複数のアクターでの話し合いによる解決が「観光まちづくり」で主流となる中で、著者はファシリテーターの役割の重要性を主張し、その役割や求められる技術について考察を加えています。

第7章では、瀬戸内国際芸術祭でのアーティストレジデンス（アーティストが島に暮らしながら制作活動を行う）を事例に、島民とアーティストとの信頼関係がどのように構築されてきたのか、またそこから、アートプロジェクトが「土着化」するプロセスについて触れています。

終章では、産官学民の連携による「観光まちづくり」において活躍できる人材を育成するための理論構築を試みています。ここでは「観光まちづくり」の段階（萌芽段階・新規加入段階・連携段階）ごとの問題を明らかにした上で、これを分析・解決するために、アクターネットワーク理論やイニシエーション理論といった「観光人材育成」に関係する理論をどのように適用していくかを考察しています。

このように、本書の内容は観光を学術的な視点でとらえたものとなっていますが、事例研究の対象は京都の宇治茶やアニメツーリズム、瀬戸内の国際芸術祭などジャンルは豊富です。観光地の舞台裏のぞく気分が気軽に楽しめる一冊となるでしょう。